

倫敦の漱石と師

伊藤 優子



## 1. はじめに一洋行の希望を抱かずとは答へず

1900（明治33）年6月、第五高等学校英語教授であった夏目漱石（金之助）は文部省第一回給費留学生として英国留学を命じられる。明治政府による近代化政策の推進と日清戦争後に得た多額の賠償金に基づく語学教員向け留学制度創設を背景とした当時の文部省専門学務局長上田萬年（1867-1937）による決定であり、公的には教科としての英語研究すなわち英語教授法を主眼とするものであった。この決定に際して漱石は、当時の回想にもあるように一旦は辞退する一方で費用調達から推薦までの感謝を述べる書簡を送るなど、いささかの躊躇ともポーズとも取れる反応を見せている。しかしながら漱石は、同省に上田局長を訪ねて「命令せられたる題目に英語とあるは、多少自家の意見にて変更し得るの余地ある事」（『文学論（上）』14頁）を確認すると、「語学を熟達せしむるの傍余が文学の研究に従事したるは、単に余の好奇心を出でたりといはんよりは、半ばは上田局長の言を服膺せるの結果なるを信ず」（同16頁）と語学力を涵養するとともに英文学をいっそう研究しようと決意したようである。同年9月、彼は第一高等学校ドイツ語教授藤代禎輔（1868-1927）と東京帝国大学国文学助教授芳賀矢一らとともにドイツ船プロイセン号で横浜港を出発し、ジェノヴァ到着後陸路パリを経由し10月には終着駅ロンドンへと到着する。

漱石がその生涯で教えを受けた外国人教員には、母国日本においては「博士問題とマードック先生と余」に登場する第一高等中学校時代の「マードック先生」（James Murdoch, 1856-1921）をはじめ、「私の個人主義」に登場する東京帝国大学文科大学英文科時代の「デクソン先生」（James Main Dixon, 1856-1933）や論文「詩伯「テニソン」」の英日翻訳を依頼してきた「ウード」（Augustus Wood, 1855-1922）らがあった。それから、五高時代に知りあった国教会宣教師の母でプロイセン号の船中偶然にも再会したノット夫人（Grace Nott, 1853-1947）から紹介状を得（『日記』14頁、『書簡』83頁）、ペンブルック・コレッジの研究員兼司祭アンドルーズ（Charles Freer Andrews, 1871-1940）（同上）との出会いを経て、彼がロンドンで自ら教えを請うたのはユニバーシティ・コレッジのケア教授（William Paton Ker, 1855-1923）と早々に大学を辞して個人教授を行っていたクレイグ先生（William James Craig, 1843-1906）であった。

漱石は、1903（明治36）年1月の帰国までのおよそ二年間にわたる留学中に、實際の範囲と研究の方針とで大きな転換を図った。前半の一年にはすでに兆候がみられていたものの、後半の一年は社交といってもそれほど盛んとはいえず、同じ時期にかの地へ滞在あ

るいは居住していた者たちに限られ、それ以外となると日本に残してきた妻鏡子、友人や教え子らに宛てて書簡をしたためるほどであり、出発時から続けていた日記を細々と書きつけては書物を買込み精読と思索に耽ってノートを積み上げる「下宿籠城主義」とコスモポリタンの学問を奉じる「科学主義」を選んでゐる。とりわけ後者は、留学からの帰途漱石と同じ下宿に滞在した帝国大学理科大学助教授池田菊苗との出会いによって生じたもので、後の『文学論』への端緒となった。とはいえ、片や大学に属して、片や在野で、それぞれ学を究めようとする二人の師から学んだ日々が、その後の漱石の英文学者としての在り方に影響を及ぼしたことは間違いないだろう。殊クレイグ先生に関しては、漱石にとってシェイクスピアを専門とする学者の元で学ぶのは初めてであり、帰国後母校での英文学講師時代によく人気を博し支えにもなったのはシェイクスピア購読の授業であったことから注目すべきである。給費留学生時代の漱石が後の英文学研究への姿勢をいかに育んでいったのか、本論ではその手がかりをロンドンで二人の師に学んだ日々を書簡や日記、当時を回想した随筆小品から探りたい。

## 2. Ker の講義を聞く—聴講する漱石

漱石が留学地決定にいたるまでの事情は、1900（明治33）年9月の横浜港出発時から翌01（明治34）年11月までのいわゆるロンドン留学日記には認められないが、同年2月9日付けで狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎ら学生時代からの友人たちに宛てた書簡には、社会が大きくて芝居を見るにも新刊古書問わず書物を手に入れるにも一番便利なロンドンにとどまることにしたとある（『書簡』83-4頁）。留学期間の初期、大英帝国の名の通り世界を覇する国の活気あふれる首都にあつて、その地の利を活かそうと具体的な理由を挙げていることから、今後生活基盤を築いていく留学地の決定に漱石の消極的な潜在意識が働いたとは考えにくい（出口『漱石と』44頁、江藤84頁）。

留学地をロンドンに選べば次は学校であるが、この点では日記と書簡の記述が一致しており、1900（明治33）年11月5日にロンドン大学ユニバーシティ・コレッジに所属するスコットランド出身のケア教授宛てで漱石自ら手紙を送り講義聴講の許可を得ている（『日記』21頁、『書簡』84頁）。日記には、その後三週にわたり水曜日になると「Ker」や「lecture」の語と一度だけ空欄がある。三週目の同月21日には「Kerの講義を聞く。面白かりし。」（『日記』24頁）とあるが、これが聴講生としては最後の出席回となる。先にふれた四人の友人

らに宛てた書簡で、漱石は聴講をやめた理由を次のように記している。

University College へ行って英文学の講義を聞たが第一時の配合が悪い。むやみに待たせられる恐がある。講義その物は多少面白い節もあるが日本の講義とさして変った事もない。瀟車へ乗って時間を損して聴に行くよりもその費用で本を買って読む方が早道だという気になる。尤も普通の学生になって交際もしたり図書館へも這入たり討論会へも傍聴に出たり教師の家へも遊びに行ったりしたら少しは利益があろう。しかし高い月謝を払わねばならぬ。入らぬ会費を徴集されねばならぬ。そのみならずそんな事をしていけば二年間は烟のように立ってしまう。時間の浪費が恐いからして大学の方は傍聴生として二月ばかり出席してその後やめてしまった。(『書簡』85頁)

『文学論』序で「現代文学史の講義」の聴講を「三、四ヶ月にしてやめたり。予期の興味も智識をも得る能はざりしがためなり」(『文学論(上)』16-7頁)とあるように、漱石は実際に聴講し日々を記録した日記から時を下るほどに聴講期間を延ばして記す一方、実際どのような講義内容(稲垣『夏目漱石ロンドン』55頁、野網95頁)で何を面白く感じたのかまでは記していない。いずれにせよ、ケア教授の講義で扱われた作家作品も、後にふれるクレイグ先生の個人教授で扱われた作家作品さらには下宿籠城に入った漱石が自ら購入精読することとなる作家作品も、そのほとんどが漱石にとって再読するものであった。漱石がとうに過ぎた日本での学生時代を金銭と時間を費やしてまで反復するような事態だけは避けようとしたことは読み取れるが、結果的に学生時代の反復からも経済的・時間的負担からも逃れられなかったのかといえ、決してそうではあるまい。出口が指摘するように(出口『漱石と』50頁)、シェイクスピアを中心とした近代以降の詩歌と小説の発達と伝統の研究を帰国後に見据え、文献的価値の高い書籍を現地で購入し、優れた学者の指導のもと自律した精読を行うと方針を定め、それに適う選択をしたのだ。また、ケア教授は、専門が中世英文学で着任して間もなかったが、同時代の研究者としては稀なことに文学形式に歴史的側面からアプローチしており、漱石が文学形式の発達を捉えようとした『文学論』での試み、そして留学中最も長く指導を仰ぐこととなるクレイグ先生への紹介とで、漱石の求めた人物であったといえよう。

### 3. Craig 氏に至る—個人教授を受ける漱石

最後の聴講と同じ1900(明治33)年11月21日、おそらく一兩日中の返信であろうか、

クレイグから漱石宛に手紙が届くが、「滅茶苦茶な字を書きて読みにくし」（『日記』24頁）と記すほど判読に苦しんだようである。翌日、漱石は日記に「Craig に会す。Shakespeare 学者なり。一時間 5shiling にて約束す。面白き爺なり」（同上）と、その筆跡とは異なるクレイグ本人から受けた好印象と個人教授一時間当たりの費用を綴っている。『永日小品』に収録された掌編「クレイグ先生」では「一回七志じゃどうだろう。多すぎればもっと負けても好い」（『全集』146頁）とにわかには乗せして書かれているが、それでも当時1シリングは今日の五百円相当であり、かつてソールズベリー侯爵の息子セシル（Hugh Cecil, 1st Baron Quickswood, 1869-1956）の個人教授を務めていた経歴を鑑みても破格であっただろう。

クレイグはアイルランドに生まれ、1865年および70年にトリニティ・コレッジで英文学と歴史の学位をそれぞれ修めてから、76年ウェールズのユニバーシティ・コレッジで英文学教授としてシェイクスピア作品の講義を行った。79年には職を辞してロンドンへ移り、途中セシルらの個人教授を務めながら自らの文学研究を行っていた。漱石が個人教授を受けようとベイカー街、より正確にはグロスター・プレイスにある先生の自宅に通い始める頃には、すでに1888年『シンベリン』、92年にはオックスフォード版『シェイクスピア全集』の注釈、99年にはアーデン版『シェイクスピア全集』の編集の仕事があった。

クレイグの訃を報じる1906年12月18日付けのタイムズと1920年版イギリス伝記事典略伝は、同じくシェイクスピア研究家で優れた伝記的記述の名手であったリー（Sidney Lee, 1859-1926）の筆によるもので、クレイグが学者として批評家として優れた業績を残したことを評価している。それからおよそ半年後、1907年5月付けのMLN誌上でモートン（Edward Payson Morton, 1869-1914）は、リーがタイムズに寄稿した追悼文を引用しながら、海を挟んだアメリカの地での各誌反応とは裏腹な研究者間における彼の認知度の高さと功績を称えている。そして、生前彼と親交のあった人物には、“In addition to Professors Graham and Dowden, Mr. Craig numbered among his particular friends Mr. Sidney Lee, Mr. A. H. Bullen, Mr. Thomas Seccombe, Professor W. P. Ker, and Dr. John Rae.”（Morton 153）と、クイーンズ大学ベルファストのグラハム教授（Professor William Graham）や親友ダウデン（Edward Dowden, 1843-1913）、リーのみならずケア教授の名を挙げている。おそらくこれは、ケア教授とクレイグの親交に触れる文章として初出のものであろう。そして、全く異なる環境のもと研究を行った二人から期間の長短はあるにせよ教えを受け、とりわけクレイグのシェイクスピア学者としての在り方を身近に見つめていたのは、留学中の漱石その人であった。平川

が期待を寄せるように、今後イギリス伝記事典に「クレイグ氏の人柄は日本の作家で彼から個人教授を受けた夏目漱石によって見事に描かれた（一九〇九年）」（平川『夏目漱石』98頁）と加筆され広く知られる日が望まれる。

さて、漱石がクレイグの人柄を温かい筆致で描き出し師を仰ぐ穏やかな眼差しまでも感じさせる「クレイグ先生」であるが、これは帰国から数年後の1909（明治42）年1月から紙上掲載された『永日小品』の題材でも留学中の実体験に取材した一篇に数えられる。個人教授に通い始めてそう時を置かず、漱石はクレイグが大学を辞した理由を知り、文字通り目にする事となる。

客間を鍵の手に曲ると六畳ほどな小さな書齋がある。先生が高く巢をくつているのは、実を云うと、この四階の角で、その角のまた角に先生にとっては大切な宝物がある。——長さ一尺五寸幅一尺ほどの青表紙の手帳を約十冊ばかり併べて、先生はまがな隙がな、紙片に書いた文句をこの青表紙の中へ書き込んで、吝坊が穴の開いた銭を蓄るように、ぼつりぼつりと殖やして行くのを一生の楽しみにしている。この青表紙が沙翁字典の原稿であると云う事は、ここへ来出してしばらく立つとすぐに知った。先生はこの字典を大成するために、ウェールズのさる大学の文学の椅子を抛って、毎日ブリチッシン・ミュージアムへ通う暇をこしらえたのだそうである。大学の椅子さえ抛つくらいだから、七志の御弟子を疎末にするのは無理もない。先生の頭のなかにはこの字典が終日終夜槃桓磅礴しているのみである。（『全集』152頁）

鳥のように高いところへつましく書齋を構える。これから親交を深めようかどうかという教え子が相手であれども、かけがえのない研究上の宝の在り処に招き入れて惜しみなく見せる。一語一冊とシェイクスピア辞典編纂に向かうクレイグを前に、漱石は、彼の前職と個人教授の費用とを引き合いに処遇の不満をもらすというよりは志に打たれているようである。さらに漱石は、ここでいう「沙翁事典」が刊行されればシュミットによる語彙辞典の後続刊となることに対して疑問を示すが、クレイグがシュミットの全巻全頁を黒く塗り潰したように書き込みで埋め尽くしているさまを見せるので、加筆ないし修正の質量に圧倒され言葉を失うのである。

漱石の疑問は、辞典を編纂する契機と完成時期へと移っていく。クレイグは時折蔵書の配架位置が判然としない人物であったようで、身の回りの世話をした女性をその都度呼んでは手伝わせた。

「全体いつ頃から、こんな事を御始めになったんですか」

先生は立って向うの書棚へ行って、しきりに何か捜し出したが、また例の通り焦れ

ったような声でジェーン、ジェーン、おれのダウデンはどうしたと、婆さんが出て来ないうちから、ダウデンの所在を尋ねている。婆さんはまた驚いて出て来る。そうしてまた例のごとくヒヤ、サーと窘めて帰って行くと、先生は婆さんの一擲にはまるで頓着なく、餓じそうに本を開けて、うんここにある。ダウデンがちゃんと僕の名をここへ挙げてくれている。特別に沙翁を研究するクレイグ氏と書いてくれている。この本が千八百七十……年の出版で僕の研究はそれよりずっと前なんだから……自分は全く先生の辛抱に恐れ入った。ついでに、じゃいつ出来上がるんですかと尋ねて見た。いつだか分るものか、死ぬまでやるだけの事さと先生はダウデンを元の所へ入れた。(『全集』153頁)

漱石自身の記憶からは書名と刊行年をたどれないが、ダウデンが自ら編集したアーデン版にクレイグとの親交と信頼の深さを記していることから(平川『夏目漱石』88頁)、辞典編纂への大きな動機がダウデンの特別な励ましにあったことは理解に難くない。クレイグの研究環境に関する要望は、漱石という教え子も得て、少なからず満たされていたのであるから、辞典の完成に向けて日夜調査に通い言葉を吟味しながらも、具体的な期限を設定せずにできる限りを続けることに意義を見出していたのであろう。クレイグ自身はもとより間近に見ていた漱石も一体いつ完成するのか分からずにいた辞典であったが、ついにはクレイグの死によって未完となった。漱石の見た数十の手帳も散逸してしまい、前述のリーとモートンもクレイグ最後の仕事が惜しまれると書き加えている。この会話について記された後、師の志と在りし日の師への想いで心を満たしつつ掌編は結ばれている。留学中の目標を掲げたとはいえ未だ漠としたまま抱いていた時期に、クレイグという二人目の師と出会ったことで、漱石は一語一作品に真摯に向き合い精読するという姿勢を留学期間のみならず生涯という時間から見つめ直すことができたといえるだろう。



ケア教授【図1】



クレイグ先生【図2】



## 図版出典

- ・ 出口保夫『漱石と不愉快なロンドン』柏書房、2006年【図1】【図2】

## 参考文献

- 稲垣瑞穂『夏目漱石と倫敦留学』吾妻書房、1990年  
-----『夏目漱石ロンドン紀行』清文堂出版、2004年  
江藤淳『夏目漱石 決定版』新潮社、2006年  
亀井俊介『英文学者 夏目漱石』松柏社、2011年  
川島幸希『英語教師夏目漱石』新潮社、2000年  
小森陽一・石原千秋編『漱石を語る』翰林書房、1998年  
末廷芳晴『夏目金之助ロンドンに狂せり』青土社、2004年  
鈴木良昭『文科大学講師夏目漱石』冬至書房、2010年  
出口保夫『漱石と不愉快なロンドン』柏書房、2006年  
出口保夫、アンドリュー・ワット『漱石のロンドン風景』研究社、1985年  
「特集：漱石の英国十八世紀」『英語青年』第154巻第9号、2008年9月、2-20頁  
「特集・夏目漱石 比較文学の視点から」『國文學』第28巻第14号、1983年11月、6-133頁  
中井康行『倫敦の不愉快な漱石 東京の孤独な漱石』双文社出版、2011年  
夏目漱石『漱石書簡集』三好行雄編、岩波書店、2011年  
-----『漱石日記』岩波書店、2013年  
-----『漱石文明論集』三好行雄編、2005年  
-----『夏目漱石全集10』筑摩書房、2002年  
-----『文学論（上）（下）』岩波書店、2011年  
-----『文学評論（上）（下）』岩波書店、2001年  
西槇偉「響き合うテキスト（三）異国の師の面影—豊子愷の「林先生」と漱石の「クレイグ先生」、魯迅の「藤野先生」』『日本研究』第36集、国際日本文化研究センター、2007年、47-66頁  
仁木久恵『漱石の留学とハムレット 比較文学の視点から』リーベル出版、2001年  
野網摩利子『夏目漱石の時間の創出』東京大学出版会、2012年  
野谷士・玉木意志太『漱石のシェイクスピア』朝日出版社、1974年  
平川祐弘『夏目漱石 非西洋の苦闘』講談社、1991年  
-----『内と外からの夏目漱石』河出書房新社、2012年  
山内久明「講演会 英文学者としての漱石」新宿区、新宿歴史博物館、2007年11月22日  
Morton, Edward Payson. "Mr. William J. Craig (1843-1906)." *Modern Language Notes* 22:5(1907), 153.  
Sherbo, Arthur. "Craig, William James (1843-1906)." *ODNB* <<http://www.oxforddnb.com/view/printable/32611>> 30 Nov. 2013  
-----, "Dowden, Edward (1843-1913)." *ODNB* <<http://www.oxforddnb.com/view/printable/32882>> 30 Nov. 2013